

近世初期「所の代官」の動向 (一)

— 信州伊那郡香坂家を中心として —

はじめに

天文二十三年（一五五四）より天正十年（一五八二）に至る二十八年間の伊那谷の支配者は武田氏であつた。武田氏の伊那支配方式は下条・知久等旧族を利用し、そのもとに各郷の有力在地土豪を代官に登用して年貢徴収等にあたらせることであつた。彼等は史料のうえでは、「郷代官」「所の代官」「代官肝煎」「御代官」と呼ばれているが、本稿においては領主派遣の代官と区別して「所の代官」と呼称することとする。

伊那谷においては、この「所の代官」制が武田氏以後も各支配者に継承されて近世初頭まで存在したが、天正十八年を契機としてすでに擬制的なものになつていたといわれている⁽¹⁾。しかるに、伊那谷の後進地域に広がる近世初期の幕府領ないしは旗本領においては、依然として「所の代官」が実体として存在し、重要な役割を帯びていた。

そこで、近世初期の「所の代官」は領主権力とどのような関係をも

今 牧 久

ち、村落内においてどのような地位にあつたのであろうか、彼等の動向は後進地の村落構造をさぐる重要な指標となるのである。本稿においては、伊那郡大草村⁽²⁾（現・上伊那郡中川村南地区）の香坂家の動向を中心として、後進地の支配形態の特色について考察してみたいと思う。

一 天正・文禄期の香坂右近助

香坂家の動向を史料的に明らかにできるのは、元龜三年（一五八二）知久頼氏宛行状⁽³⁾をもつて初めとする。

下村・毛呂窪合拾貫文田置者也、別而綺羅を嗜、軍役等之儀、専要者也、仍如件、

元龜三年八月

香坂右近介

（毎久）頼氏（花押）

また、武田氏伊那支配の末期には伊那辺に地を給されている。この時期の香坂右近助は武田氏の給人であつた。

定⁽³⁾

武田信玄朱
印狀案

元龜三年八月

五二八

(武田信玄)
定

一長柄二間之事

一持鐘二間之中之事

付、寒共、

一持小旗、差物もない四方之事

一對手之事

一鐵炮放之事

付、玉藥之事

一一統之立物之事

一馬之事

自庵之江湖之申樂舞、妻之衣裳、私宅之造作木之費用、一切被停之、

右条、無油断支度肝要候、隨而近日小田原、當方双旗、至關東可有御勤候、敵味方之覺候之間、知行役之外、

別而人数令加増、可被勤軍役候、此一往者不可成後日之龜鏡候、有其分別、被應下知者、可為感悅候者也、仍如件、

元龜三年

八月十一日

(永内郡)
葛山家

鐵炮

〔訓読〕定(朱印) (訓読中略す)

自庵の江湖の申樂舞に、妻の衣裳、私宅の造作等の費用、一切これを停めらる。

右の條々、油断なく支度肝要に候、隨つて近日小田原、當方双旗を双べ、關東に至つて御勤あるべく候、敵味方の覺に候の間、知行役の外、別して人数を加増せしめ、軍役を勤めらるべく候。この一往は後日の龜鏡となすべからず候、その分別あり、

下知に應ぜらるれば、感悅たるべく候ものなり。仍つて件の如し。

是月、伊那郡知久頼氏、香坂右近介ニ、伊那郡下村・毛呂窪ノ地ヲ宛行フ、

〔藤本蕃氏所藏文書〕○下伊那郡千代村 藤本蕃氏所藏

〔伊那郡〕下村・毛呂窪合拾貫文出置者也、別而縞羅を嗜、軍役才之儀、專要者也、仍如件、

元龜三年 申八月

(知久)
頼氏(花押)

香坂右近介

九月大 甲申朔

十七日、飛驒江馬輝盛、越中ノ上杉謙信ノ陣ニ到リ、村上國清ニ迎ヘラル、

〔上杉家文書〕○山形縣 上杉隆憲氏所藏

○上(謙信) 昨晩江馬方被打着候、爲此迎源五方被越候へ者、自敵陳可乗切様ニ見ヘ候つる間、出備候得者、あなこヨリ此

方之武見之衆へ押應候、豊前守者共助合、敵十余討捕、富山へ押籠候、○中(謙信)

(元龜三年) 九月十八日

(上杉)
謙信(花押)

元龜三年九月

五二九

も困難な時代であったと思われる。然しこの間に、浪合の堯翁院（七世開山）、伴野慈恩院（八世）伊久間法雲寺（九世）等が開山されているのも不思議である。更に、それから十五年後には中沢（駒ヶ根市）の常秀院（十一世）が、続いて桃源院（十二世）が開山されている。即ち、有力末山七ヶ寺が、武田侵攻の前後に開山されたことになる。

この事は単なる偶然では無く、恐らく武田氏の伊那侵攻と、その後の伊那谷の政治的な情勢とに、何らかの関係があったのではないかと思うが、はっきりしたことは分らない。

(7) 知久氏の復帰と再亡命

神の峯落城（天文二十三年・一五五四）以来、徳川方に身を寄せていた知久頼氏（頼康の弟）は、一五八二年の復帰に先だつ一〇年前の元龜三年（一五七二）（神の峯落城より十八年後）秘かに知久郷に帰還していたらしく、香坂右近介に宛てた文書が残っている。（郡史七巻）この年は武田信玄が大軍を率いて京都へ上るために、三方原で、家康軍を破り野田城を攻略した後、病気を養うため鳳来寺附近に滞在していた時に当たる。伊那の諸将は武田軍に従い出陣していた。この間隙をねらって、情報収集や失地回復の運動を行うためではなかったかと思われる。泉龍院八世 宗参の時である。翌々年には慈恩院が開山されている（天正二年＝一五七四）当時、武田方に降伏して僅かに知久の名を止めていた叔父の頼輝もいたので、短期間の滞在は可能であったと思われる。それに遠州から青崩峠

を経て遠山の木沢から法全寺へ出る道、あるいは上村から小川路を越える道はいずれも直接知久郷に通じていたし、伊那谷諸族の武田離反を計るのは徳川方にとっても重要な工作として支援をしたのではないかと思う。

一方、武田氏は、阿島安養寺（永録十一年・一五六八）に旧寺領を還し、元龜三年（一五七二）文永寺に、南原の地七拾八貫八百と他に拾五貫の地を寄進するなど、民心の安定を計っているが、打ち続く出兵と土木事業への強制従事等重税のために人心は次第に武田氏を離れて行った。

天正元年（一五七二）信玄は終に浪合附近に於て病没して跡を継いだ勝頼は、翌年阿島安養寺の毘沙門堂を修復し、更に天正五年（一五七七）には文永寺に禁制を掲げ、殺生違乱を禁ずると共に寄進もして人心の安定をはかっている。

天正三年（一五七五）の長篠の戦に於て、天下最強を誇った武田の騎馬軍団も、織田・徳川連合軍の鉄砲作戦に破れて大損害を蒙り敗退した。

この年、下伊那中央部に居た坂西氏が武田氏に叛いたが、松尾の小笠原信嶺によって鎮定された。この坂西謀反もその理由は、はっきりしないが、知久頼氏を通じて、徳川方の誘いがあったのかも知れない。何れにしても長篠の敗戦以来、武田氏の占領地内には、織田・徳川両氏からの誘いもあり、次第に武田離れの傾向が生じたことと思う。その為、天正十年（一五八二）織田軍の伊那侵入に当たり、武田氏と縁戚関係に在った下條氏以外には、さしたる抵抗も無く、武田軍は、飯田・大島の二城